近世後期から明治初年における遠江国神職の蔵書傾向

―敷知郡宇布見中村家の蔵書の内容とネットワークの分析―

松尾　由希子（静岡大学大学教育センター）

**要約：**　論文の概要を400字以内で記載ください。

**キーワード：**キーワード1, 2, 3, 4, 5

**はじめに**

本稿の目的は、近世後期から明治初年の移行期における遠江国の神職の家の蔵書傾向について、書籍の内容及び蒐集のネットワークに着目して、検討することにある。題材として、現存する中村家の蔵書と蔵書に押された印（蔵書印）を用いる。書籍の内容から、神職の学問や教養の具体的な内容について、蔵書印から書籍蒐集をとりまく中村家のネットワークについて推測することができる。

今日、近世の書籍をめぐる研究は盛んに行なわれている。家に所蔵された書籍（蔵書）については、1990年以降に、村役人や医家、神職などの地域の指導者・知識人の家に残された蔵書の存在が指摘され、その書籍の内容について報告されるようになった[[1]](#endnote-1)1)。家の蔵書研究が課題としてきたことの1つに、家人の学問や教養がある。これまで、庶民の学習に関する先行研究は、主に手習塾や私塾という教育機関を事例にとりあげてきたため、家の書籍を題材とすることは新しい試みであった。ただし、蔵書の存在は、そのまま家人の読書や学習につながらない。この課題を補うために、今日では家人の学問習得や教養形成を実証する場合、蔵書の存在に加えて、実際に家人の読書を示す史料、例えば「読書日記」や書籍への書き込みなどの史料を合わせて分析している[[2]](#endnote-2)2)。2つに、書籍の蒐集をとりまくネットワークである。地域の知識人の存在[[3]](#endnote-3)3)や家業（職務）との関連[[4]](#endnote-4)4)が指摘されてきた。他にも蔵書をもつ家が地域に果たした役割[[5]](#endnote-5)5)や家の蔵書による家人の家業意識の形成[[6]](#endnote-6)6)について明らかになっている。

本稿では、中村家の蔵書を題材にして、1.書籍の内容から中村家の学問・教養の特徴、2.蔵書印から書籍蒐集をとりまくネットワークについて検討する。上でも述べたように、本来であれば、読書を示す史料を合わせて検討する必要があるが、対象事例の書籍の点数が多いため、先に本稿において蔵書傾向としてまとめたい。

事例として、遠江国郡（現静岡県浜松市西区雄踏町宇布見）の神職中村家をとりあげる。主な史料は、中村家の家人が近世後期から明治8年（1875）までに蒐集した書籍（「中村家文書」浜松市博物館寄託）約550点1100冊である。中村家は、代々宇布見で神職を襲職し、士族との関わりも深い家であった。本稿では、書籍蒐集の時期として明治8年で区切っている。明治8年は、中村家の蔵書形成に強く関わったと考えられる29代当主東海（1835~1922）が、中村家に養子入りした年である[[7]](#endnote-7)7)。別稿において、中村家の蔵書形成について東海の養子入りに焦点をあてて検討するため、本稿でも明治8年で区切った。

**1 中村家の由緒と特徴**

（1）敷智郡雄踏村宇布見について

　中村家の所在地である敷智郡宇布見村は、近世において浜松藩・吉田藩・幕府の支配下にあった。「雄踏町沿革史遺稿」[[8]](#endnote-8)8)によると、明治維新前の宇布見の石高は、1518石5斗4合である。その内訳は、浜松領（井上河内守所領）400石、幕府直轄（中泉代官所宰領）900石余り、吉田領（現豊橋、松平伊豆守）160石となっていた。

　明治以降になると、明治4年（1871）11月に廃藩置県の令が出て、宇布見村は山崎村とともに浜松県の管轄になり、第11大区19小区と称し、区長、戸長行政を執ることになった。明治8年（1875）、第11大区18小区に変更し、区長及び副戸長をおいて村政を執った。明治9年（1876）になり、浜松県は、静岡県の中に統合された[[9]](#endnote-9)9)。

（2）中村家の特徴

　「中村家由緒書」[[10]](#endnote-10)10)や「遠江国雄踏宇布見中村家」[[11]](#endnote-11)11)に記された当主の履歴から、中村家の特徴をまとめたい[[12]](#endnote-12)12)。図1は、中村家の略系図である。「家」[[13]](#endnote-13)13)にとって特徴的な履歴をもっていたり、蔵書形成に関わったりしている当主を中心に作成した。

　中村家の初代は、三河守（源頼朝の弟）の息子で、大和国（現奈良県）に居住した。7代正清は、大和国中村郷（現奈良県北葛城郡）に住み、唐院城主であったとされている。その後、中村家の子孫は足利義満に太刀などを賜ったり、文明13年（1481）に今川上総介に招聘されて遠江国磐田郡土橋公に米地などを賜ったりしている。家人の武功によって敷智郡宇布見、和田、平松、山崎、大白須など「五ヶ荘」（五郷）を賜ったという。そして、文明15年（1483）に宇布見に移住した。16代正継は、駿河国松枝城主穴戸新左衛門の二男で、中村家に養子入りした。今川家に仕官したために今川家が治めていた駿府に居住したが、勤めあげた後は「米大明神補任神主職」に就いた。米神社（息神社）とは、宇布見にある神社であり、中村家の屋敷近くにある。17代光貞も米神社の嗣官を襲職し、今川家に仕官し、「領主今切船支配」についている。

　近世において、遠江国での中村家の位置づけを確固たるものにしたのが18代正吉の代と考えられる。徳川家康と正吉の関係をみていく。家康は、元亀元年（1570）から天正14年（1586）にかけて、浜松城主を勤めた。永禄11年（1568）3月に、徳川家康がお忍びで中村家に立寄り、1泊したといわれている[[14]](#endnote-14)14)。さらに、家康が浜松城主時代である天正2年（1574）に、中村家で家康の二男（後の結城秀康）が誕生したという[[15]](#endnote-15)15)。このことを受けて、中村家は、初代福井藩主秀康の福井松平家（秀康の二男の子孫）に加え、美作津山藩松平家（秀康の長男の子孫）、浜松藩主に御目見を許され、金銀などを下賜されていた[[16]](#endnote-16)16)。結城秀康の誕生や胞衣塚については、さまざまな由緒書に記されている。その中の1つを以下に記す。

……十八世正吉徳川家康公本国打入ノ先導ト為リ功アリ佩刀賜銘日天賜海別御代官兼軍船奉行トナル、「天正元」公ノ側室永見氏娠メル公密ニ之ヲ正吉ニ託「シ本多重次護ス」セシム、既ニシテ○年二月八日分娩男ヲ産ム」分娩男ヲ生ム、是ヲ越前中納言秀康卿ト為ス、正吉之ヲ鞠「養」育スルコト三歳、公其忠恪ヲ嘉ミシ葵紋附小柄笄及時服ヲ賜テ之ヲ賞ス、越前作州二侯倶ニ卿ニ出ルヲ以テ~~作州侯乃チ~~正吉子孫「正」ヲ禄シ世々津山藩籍ニ列シ仍ホ本土ニ在テ卿ノ産土「氏神」天神社「宮祠官」「兼初テ」及産所胞衣塚ヲ護~~シ兼テ~~「ス」~~祠官タラシム~~、越前侯モ亦世禄百石ヲ給ス、明治〔空欄〕年華族禄制改正ニヨリ世襲ノ家禄廃セラル、爾来~~産土~~「松平家氏神」天神社及産所胞衣塚保護科トシテ~~松平~~両家ヨリ金弊若干年々贈与「ス」~~有ス~~、……

（「中村東海履歴」[[17]](#endnote-17)17)）

中村家は、延宝6年（1678）から庄屋を勤めた[[18]](#endnote-18)18)。その間、浜松藩主への「独礼」を許された。「独礼」とは、年頭などにおいて藩主に単独でお目見できるものであり、庄屋の格式を表す。正保・承応（1645～1654）の頃に独礼庄屋であったのは、有玉村高林家、万斛村鈴木家、伊場村岡部家、笠井村山下家であつた。延宝7年（1679）には、中村家の当主も独礼庄屋として藩主に挨拶をしたという記録が残っている[[19]](#endnote-19)19)。美作津山藩主松平三河守には面謁を賜り[[20]](#endnote-20)20)、士分格であった。

　以上、近世において中村家は米神社の嗣官を襲職し、庄屋を勤め、士分格であるという特徴をもっていた。

**2　蔵書形成に関わった中村家の家人**

　ここでは、蔵書形成に関わったと考えられる中村家の家人について、履歴をまとめる。蔵書形成に関わった根拠として、書籍への書き込みがあげられる。例えば、持ち主や写本の作成者の名前が書き込まれることがある。中村家の蔵書には、このような書き込みのある書籍がある。また、学習履歴や教育履歴から蔵書形成に関わった可能性のある家人が存在する。以上の観点から、近世から明治8年にかけて中村家の蔵書形成の中心であったと推測できるのは、27代亀年、28代、29代東海である。

**註**

1. 1) 家の蔵書の存在について指摘した先行研究は、松尾由希子「江戸期上層庶民の家の蔵書に関する研究－学習環境の視点から－」（博士論文、2008年、14～15頁）にも記した。その一つに高倉一紀「竹口家の教養と国学―蔵書構成と所蔵率の分析」（『伊勢商人竹口家の研究』和泉書院、1999年）などがある。 [↑](#endnote-ref-1)
2. 2) 例えば、杉仁氏の研究（『近世の在村文化と書物出版』（吉川弘文館、2009年、228～243頁）がある。ただし、家の文書の中に、蔵書とその読書を示す資料が同時に存在することは多くない。 [↑](#endnote-ref-2)
3. 3) 平野満「蔵書に見る知的状況―平山・宇井・林家の場合」『大原幽学とその周辺』八木書店、1981年。石川秀和「江戸近郊農村にみる豪農の文化活動―安川家三代の事例―」『立正史学』第96号、2004年。など [↑](#endnote-ref-3)
4. 4) 松尾由希子「近世後期尾西庄屋のネットワークと教養形成―海西郡荷之上村服部家の蔵書と読書の分析」岸野俊彦編『尾張藩社会の総合研究　第三篇』清文堂出版、2007年。など [↑](#endnote-ref-4)
5. 5) 小林文雄「近世後期における『蔵書の家』の社会的機能について」『歴史』第76輯、東北史学会、1991年。松尾由希子「近世後期地方医家の蔵書形成とその動機―越後国西蒲原郡鈴木家の事例より」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第53巻第2号、2007年。など [↑](#endnote-ref-5)
6. 6) 鈴木理恵「近世後期における神職の専業化志向と蔵書形成―芸州山県郡井上家を例として」頼祺一先生大館記念論集刊行会編『近世近代の地域社会と文化』清文堂、2004年。など [↑](#endnote-ref-6)
7. 7) 東海が中村家に養子入りしたのは明治8年であるため、対象時期において東海は中村家の人ではない。しかし、中村家蔵書には東海が明治8年までに蒐集した書籍が存在するため、明治8年以降に当主になった東海も事例対象としている。 [↑](#endnote-ref-7)
8. 8) 松倉茂「雄踏町沿革史遺稿」『雄踏町誌　資料編四』浜名郡雄踏町、1971年、28頁。 [↑](#endnote-ref-8)
9. 9) 古橋一男、嶋竹秋、新村嘉十編『雄踏村誌』雄踏町誌郷土資料部、2000年、31~32頁。 [↑](#endnote-ref-9)
10. 10) 中村家文書「中村家由緒書」（資料番号715-11）。本稿で用いる「中村家文書」は全て、浜松市博物館寄託の史料である。 [↑](#endnote-ref-10)
11. 11) 中村家文書「遠江国雄踏村宇布見中村家」（資料番号1478） [↑](#endnote-ref-11)
12. 12) 由緒書の性格として、家の権威を高めるために史実とは異なる説明が述べられることがある。そのため、他の史料と合わせて由緒書の内容の真偽を確認する必要があるが、現段階において由緒書に補足できるものをみつけられていないため、由緒書を参照する。 [↑](#endnote-ref-12)
13. 13) 近世は、「家」制度の社会である。以降、「家」と表記する場合、「固有の家名、家産、家業をもつもので、地域共同体と結びついて存在する」（前掲註1「江戸期上層庶民の家の蔵書に関する研究－学習環境の視点から－」1頁）という観念をさすものとする。近世において、家人は世代を超えて「家」が永続することを願っていた。 [↑](#endnote-ref-13)
14. 14) 「中村家由緒書」（前掲註10）の18代正吉の履歴に「永禄十一年三月東照宮三州ヨリ御忍ニテ正吉宅被成御一泊、翌日正吉故小藪村迄御船ニテ濱松城地御案内仕候」とある。 [↑](#endnote-ref-14)
15. 15) 「遠江国雄踏村宇布見中村家」(前掲註11) [↑](#endnote-ref-15)
16. 16) 結城秀康の生誕に関わる胞衣塚は中村家の屋敷の中にあり、「中村家由緒書」（前掲註10）などによると明治半ばを過ぎても、松平康荘侯爵など松平家が中村家に修繕費を援助していた。 [↑](#endnote-ref-16)
17. 17) 中村家文書「中村東海履歴」(資料番号715-9)。 同史料は下書のため各所に挿入や見せ消ちなどの推敲した形跡を確認することができる。そこで、史料引用に関してはなるべく原文に近い様式になるように努めた。そのため、意味が取れない箇所・文意があること、煩雑に見える点をあらかじめことわっておく。なお「　」内はとくに断りのない限り挿入を、意味する。見せ消ちは抹消線であらわし、囲み線は原文に準じた。 [↑](#endnote-ref-17)
18. 18) 浜松市『浜松市史　二』浜松市、1971年。 [↑](#endnote-ref-18)
19. 19) 同上書、156～157頁。 [↑](#endnote-ref-19)
20. 20) 「遠江国雄踏村宇布見中村家」（前掲註11）の28代大館の履歴に「天保十三年寅年二月出府家督継目御礼美作中将斎民殿於表書院面謁任（ヵ）嘉例古酢鮮魚差上葵紋服拝受」「弘化二巳年美作国主中将松平斎民殿天神宮神社代々世襲兼作州藩士列候処」とある。 [↑](#endnote-ref-20)